

Title	<研究論文><mind-mindedness>とは何か：養育者による子どもの心的状態の読みとりとそれが支える相互作用の在り方
Author(s)	篠原, 郁子
Citation	教育方法の探究 (2003), 6: 69-75
Issue Date	2003-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190275
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

＜mind-mindedness＞とは何か

—— 養育者による子どもの心的状態の読みとりとそれが支える相互作用の在り方 ——

篠原 郁子

1. はじめに

近年、自他の心の理解の発達に関して、「心の理論」研究に代表されるような多くの知見が得られている。「心の理論」とは、願望、情動、信念、意図といった心的状態に関する体系的な知識、あるいは心というものに対する理解の枠組みと考えられている。従来、子どもがこれを獲得していくプロセスを解明するために、実験的な「心の理論」課題が編み出され、その成績が注目されてきた。特に、他者が持っている信念を推測させる「誤信念課題」は、他者は同じ現実世界に対して自己とは異なる信念を持ちうるということ、さらにその信念は、時に現実に対して誤ったものであり得ることの理解の指標として多く用いられ、それらの課題に正答できるようになる時期が注目されてきた。その結果、3歳から4歳半の間に有意に正答率が上昇し、多くの子どもが4歳～5歳前後で課題をパスすることができる、すなわち心の理論を獲得できるようになると考えられることが示されている（Wellman, Cross & Watson : 2001など）。

これら一連の研究では「心の理論」は多くの子どもが普遍的に、やがて獲得するものと仮定され、何歳頃に理解可能になるのかという一般的、普遍的なプロセスを明らかにすることに主眼が置かれてきた。その背景には（「心の理論」発達を説明する理論的立場は複数存在するものの、例えば）、生得的な「心の理論」モジュールを仮定してその発達メカニズムを説明しようとする1つの立場がある。その立場によると、子どもは生得的に備えているモジュールが成熟するのにしたがって、心に関する理解を進めていくのだという。すなわち、生得的なメカニズムにしたがってその発達プロセ

スは進行し、多くの子どもはある年齢に達すれば「心の理論」を獲得することが可能になると考えられているのである。それ故に、その一般的発達プロセスを解明することが従来中心的に行われてきた。だが、心の理解の発達に関する一般的なタイムテーブルの解明が進められる一方で、そこに見られる「個人差」への注目は希薄であり、たとえば個人差が存在したとしてもそれは問題にならないほど小さなものとして扱われてきた。

しかし、実験的な「心の理論」研究に対し、日常生活場面に見られる子どもの心に関する理解に着目した研究では、そこに大きな個人差が存在することが示されている。日常生活場面においては、実験的な「心の理論」課題への正答が可能になるとされる年齢よりも幼い子どもたちが、すでに自他の心に関する会話ややりとりを行っていることが指摘されている。例えば、2歳くらいの幼児がすでに感情や思考状態についての言及を行っているのだという（Bretherton & Beeghly : 1982, Brown & Dunn : 1991など）。だが同時に、心的状態に関する会話の開始には大きな個人差が存在することも指摘されており（Brown & Dunn, 1991）、心の理解の発達には、従来の「心の理論」研究では十分な注意が払われてこなかった個人差の存在を想定すべきであると考えられる。

また、そのような心の理解の発達に関する個人差の存在が示される中で、何がその個人差に影響しているのかという規定因への関心が寄せられるようになってきた。これは、心の理解の発達に関する、従来の一般的タイムテーブルの解明への関心から、その発達に影響を与える要因を視野に入れたプロセスへの関心へという1つの展開である

と考えられる。

2. 心の理解の発達と子どもをとりまく社会的環境

心の理解の発達に関する個人差の規定因への関心の中で、子どもの心の理解の発達と子どもを取り巻く社会的環境との関連が注目されてきている。特に、他者の心の理解の発達に関して、家族やきょうだいの数との正の関連が指摘されている (Perner, Ruffman & Leekam : 1994, Dunn, Brown, Slomkowski, Tesla & Youngblade : 1991 など)。その理由として、家族やきょうだいの多さに伴う、言い争いや葛藤の経験の多さが発達の促進因として作用するのだろうと考えられている。言い争いや葛藤場面では、欲求や願望など心的状態を示す言葉が多く使用されると想定される。また、葛藤の対象となる同じ現実について、他者の見解に触れる機会が多くなり、自分と相手が異なる見解を有していることに気づく機会も多いと考えられる。さらに、Dunnら (1991) は特にきょうだい関係に着目し、大人と違って対等な立場にあるきょうだい関係において、自己の利益を守るためのだましあいや葛藤とその修復を経験することが、子どもの自他の心の理解を促進すると考えられることを指摘している。

このように、家族内でのきょうだいをはじめとする他者とのやりとりの経験が、子どもの心的な世界への理解を引き上げると考えられているが、家族の中の大人、すなわち養育者との関係性はいかなる影響を持っているのだろうか。Dunnら (1991) は、養育者による年上のきょうだいの行動に対する心的観点からの言及が年下の子どもの心の理解の能力の高さと関連することを示しているが、養育者と子どもの二者間における直接的な関係はいかなる影響を持ちうるのだろうか。養育者との関係性は、きょうだい関係が始まるよりも早期から緊密にとり結ばれ、しかも連続と続くものである。そこで本論では、子どもの心の理解の発達の個人差について、それを支えるものとして子どもをとりまく社会的環境へ注目し、特に養育者との関係性が果たす役割について取り上げるこ

としたい。

3. 心の理解の発達と養育者との関係性の関連

養育者と子どもの関係性を表す指標の1つとして、代表的なものに愛着関係があるだろう。Bowlbyによって提示された養育者と子どもの愛着関係は、後に Ainsworthら (Ainsworth et al. : 1974など) によって愛着の安定性に着目した関係性の質的分類が行われた。そして、安定型と不安定型 (下位分類として3つのタイプが想定されている) に分類される愛着関係の質と、子どもの能力や特徴との関連が従来多く問われてきた。その中で、近年、愛着のタイプと心の理解を含む認知能力との関連性が指摘されている。先に述べた「誤信念課題」に関して、愛着安定型と不安定型の子どもの成績に差が見られ、愛着安定型の子どもの方が「心の理論」に関する能力が高いことが報告されているのである (Fonagy, Redfern & Charman : 1997, Meins, 1997)。

特に Meins (1997) は、子どもが1歳前後の時点で愛着の質を測定し、4、5歳時における他者の信念の推測能力との関連を取り上げ、愛着安定型の子どもの方が誤信念課題の成績が優位であることを示している。これは、乳児期の愛着の質、すなわち養育者との関係性の質が、後の心の理解の発達に関連することを指摘するものである。それはつまり、子どもが乳児期から継続して経験する養育者との関係性の質に、後の心の理解を左右するような何らかの特徴が含まれている可能性を示唆するものであろう。

では、なぜ乳児期に養育者との間に安定した愛着関係を持つことが、その後の心の理解に関する能力の高さと関連するのであろうか。愛着安定型の養育者—子ども関係のいかなる側面が、子どもの心の理解の促進に影響し得るといえるのだろうか。この点について、以下、Meinsらによって提示された説明を見ていくこととする。

4. 心の理解の発達を支える養育者の特徴

Meins (1997) の一連の研究はもともと、愛着

の安定性と言語獲得、象徴遊びなど広く認知発達との関連性をとりあげたものである。その中で、認知一般に対してではなく、特に自他の心が絡む領域に関する愛着安定型の子どもの能力の高さを指摘している。そして、愛着のタイプと子どもの心の理解能力との関連について、愛着安定型の子どもの養育者が有する特徴に注目した説明をおこなっている。

従来、子どもが安定型の愛着関係を持つことを予測する養育者側の要因の1つとして、「子どものシグナルに気付き、正確に解釈し、敏速かつ適切に応答する」という「敏感性」(Ainsworth et. al. : 1974) が重視されてきた。だが、Meinsらはこの「敏感性」という概念についてそれが表すものが広く漠然としている点を指摘している。その概念の中でも特に重要で本質的な側面とは、子どもの身体的・情緒的サインに応答することよりも、子どもの行動の背後にある心的状態へ敏感であること、すなわち子どもを心的な観点から理解することなのだという。Meinsらは、この、子どもを心的観点から理解するという点の重要性を指摘し、養育者が子どもを発達早期から心を持った独立した存在とみなす傾向のことを<mind-mind-ness>と呼んでいる (Meins : 1997, Meins, Fernyhough, Fradley & Tuckey : 2001)。

自身の一連の研究 (Meins : 1997) において、愛着安定型の子どもの養育者が高い<mind-mind-ness>を有していることを示すいくつかの報告が行われている。例えば、1歳頃に測定した愛着のタイプが不安定型の子どもの養育者は、語彙を獲得する以前の19ヶ月児の発話を「わけのわからない」ものと捉えるのに対し、安定型の子どもの養育者は、そういった発話がすでに意味を持っていると捉えやすいことを示している。また、安定型の子どもの養育者は子どもが3歳の時に、子どもについて身体的・行動的特徴よりも、心的な特徴により焦点化した叙述を行いやすいことが示されている。

これらの報告は、愛着のタイプ測定後における養育者の行動に<mind-mind-ness>の高低が

絡む可能性を示したものである。近年、これに加えて、愛着のタイプ測定以前における養育者の特徴と、その後測定される愛着のタイプとの関連性を問う研究が実施されている (Meins et al. : 2001)。そして、子どもが6ヶ月時における自由遊び場面で乳児の心的状態に関する言及を行うことが多い養育者の子どもは、12ヶ月時における愛着の質の測定で安定型を示すことが多いことを明らかにしている。この結果は、養育者の<mind-mindedness>が愛着安定型の予測因として機能していることを示している。先述したように愛着のタイプとは養育者と子どもの関係性の質に関するものであり、その関係性の質はタイプ測定以前における早期からの相互作用を通して形成されてきたものと思われる。したがって、その早期からの相互作用の在り方に、養育者の<mind-mind-ness>の高低といった特徴が影響していると考えられるのである。

この、養育者との相互作用と子どもの心の理解の発達の関係について、Meinsはヴィゴツキー理論に基づく考察を行っている。ヴィゴツキー理論によれば、思考などの高次精神機能の発達は、最初は対人関係における精神間機能として現れ、次いで個人内における精神内機能として現れるのだとされる。そして、「精神間」から「精神内」への移行は、対人関係における相互作用の内在化プロセスを経て実現されるのだと考えられている (Vygotsky : 1978など)。Meins (1997) は、子どもの高次精神機能の発達に対する社会的相互作用の重要性とその機能を示唆するヴィゴツキー理論が、子どもの自他の心の理解の発達と、養育者との関係性の質 (すなわち愛着のタイプ) との関連を説明するのに有効であることを指摘している。子どもの心の理解が、養育者との相互作用の内在化によって実現され、促されると想定するならば、その相互作用の在り方如何が子どもの発達の如何に影響すると考えられる。そして、Meinsの提唱する養育者の<mind-mind-ness>は、発達早期から子どもとの間で行われる相互作用の在り方に作用し、子どもの心の理解の発達へと影響す

ると考察されているのである。

では、養育者の〈mind-mindedness〉は相互作用の在り方に具体的にはどのような影響を与えているのだろうか。養育者の〈mind-mindedness〉がもたらす、結果的に子どもの心に関する理解を引き上げるような相互作用の在り方とはいかなるものなのか。養育者の持つ特徴と相互作用の在り方について、Meinsらによる説明を見ていくこととする（Meins：1997, Meins, Fernyhough, Russell, & Clark：1998, Meins & Fernyhough：1999）。

5. 養育者の〈mind-mindedness〉と

それが支える相互作用の在り方

Meinsらによれば、まず第1点目に、子どもの心的な状態を理解しようとし、欲求や意図に対して敏感である養育者は、活動に際する子どもの現在の心的状態と、潜在的に有しているであろう能力との「間」の領域に敏感であり、そのために子どもの「発達の最近接領域」(Vygotsky：1978)を正確に同定しやすいのだという。そして、子どもとの関わりにおいて、子どもが示す様々なサイン（そこに読みとる心的状態）を子どもに対する自身の接し方のフィードバックとして利用し、相互作用を子どもの「発達の最近接領域」の範囲内に調整することができるのだという。高次精神機能の「精神内」への移行をもたらす相互作用の内在化に関して、相互作用が子の「発達の最近接領域」の範囲内にあるよう調整されることは、内在化を容易にすると考えられる。したがって、〈mind-mindedness〉の高い養育者は、相互作用を調整して子の「発達の最近接領域」に働きかけることができ、子どもを取りまく環境、文化の中にある素朴な「心の理論」の獲得に関して、必要な足場（scaffolding）を適切に作ることもできるのだという。

第2点目に、子どもを心を持った存在と見なし、心的観点から理解しようとする養育者は、子どもとの相互作用において、心に関するやりとりを多く行っていることが想定されるのだという。つま

り、発達早期からやりとりの中に心的状態を表す語彙を多く絡ませているものと思われる。それは、子どもが信念や欲求といった心の理論において重要な心的概念を獲得する足場を作り、子どもの心の理解の発達を支えるのであろうと述べられている。

第3点目に、〈mind-mindedness〉の高い養育者は子どもとの間に敏感で相互的な関係を持つことができ、それは子どもにとって「対話的やりとり」を内在化することを容易にするのだという。この「対話的やりとり」は、現実に対する多様な見方が存在することの気づき、理解を支えるのだと考えられている（Fernyhough：1996）。この点に関して、Meins(1997)はさらに、愛着安定型の子どもを養育者は子どもとの間で「モノ」を介したやりとりを行いやすいことを指摘している。モノを介したやりとりでは、子どもと養育者がモノに対し注意を共有する状況が生まれやすく、子どもが見ている対象、例えば「ボール」に対し、養育者は「ボール」という名称にとどまらず色や形など様々な言葉を用いることが想像される。そういったやりとりは、1つの対象にも複数の側面があり、それに対する多様な見方（心的な表象）が存在することへの気づきと理解を支えると考えられるのである。

以上のような、養育者の〈mind-mindedness〉が支える、子どもの心に関する理解を促進するような相互作用の在り方に関するMeinsらの説明は、現在のところ実証的データに裏付けされたものはない。したがってその実証は今後に残された課題であろう。だが、ここで提示された説明は〈mind-mindedness〉すなわち子どもを早期から心を持った独立した存在と見なし、心的観点から子どもを理解しようとする、子どもの心に対する養育者の見解の在り方が子どもとの間で実際に行われる相互作用の在り方を左右し、それを通して子どもの心の理解の発達が促されるというプロセスについて具体的に示した点で大変興味深いものと思われる。

6. 子どもの心に対する養育者のスタンスと役割

以上、養育者が有する「子どもを心を持った存在」とみなす傾向とその影響について述べてきたが、養育者が子どもをいかなる存在であると見なすかというスタンスの在り方は、子どもとの相互作用の在り方を左右するという意味で大きな役割を持っていると考えられる。Miens (1997) は愛着の安定性に関わらず全ての養育者が、やがて子どもの発話や身振りを意図的なものと見なし、乳児を「志向的行為者 (intentional agent)」として扱うようになるのだと述べている。だが、それは必ずしも乳児を心を持った存在、すなわち「心的行為者 (mental agent)」として扱うことを意味しないのだという。子どもを志向的行為者と見なす養育者は、子どもは欲求を持ち、それを伝え表現することができると考えているのに対し、心的行為者と見なす養育者は、子どもは世界に対する表象を持ち、現実に対して様々な見解を持つことができる存在とみなしているのだという。Tomaselloらによれば、子どもは9ヶ月頃から他者を志向的行為者として理解するが、心的行為者として理解するようになるのは4歳頃なのだという (Tomasello, Kruger, and Rather : 1993)。子どもが他者そして自己を心的行為者として実際に理解しているかどうかに関わらず、〈mind-mindedness〉の高い養育者が生後数ヶ月の子どもをも心的行為者と見なすことは、子どもの発達に照らしてみれば、実体以上の心の存在を帰属しているということになるかもしれない。

〈mind-mindedness〉における、実体以上の心の存在を子どもに帰属し、それに対して働きかけを行うというスタンスは、「アズ・イフ理論」の中で重視される養育者のスタンスと近いとも考えられる。心の中核的性質であると考えられている志向性の発達について従来多くの議論が行われてきたが、(Zeedyk : 1997参照)、「アズ・イフ理論」とはその発達について特に養育者の役割を重視する理論的立場の一つである (Kaye : 1982など)。そこでは、幼い乳児は養育者によって「まるで意図を持っているかのように」扱われること

で、やがて本当に意図を持つに至るのだと考えられている。幼い乳児は「何も持っていない」すなわち養育者とコミュニケーションする能力さえも持たないと仮定されるが、養育者による「あたかも」豊かな相互作用が成立しているかのような振る舞いが、子どもの志向性の獲得に対する足場を用意すると考えられている。

養育者による「振り」を通して、乳児の外側に存在していた志向性が内側に埋め込まれる、という立場に対し、乳児の側に生得的な志向性の存在を仮定し、他者との相互作用を通してそれが成熟していくと唱える立場も存在する (Trevarthen : 1993など)。この立場では、子どもが生得的に備えた志向性の成熟を実現するものとして養育者との相互作用の重要性が唱えられている。前者の立場が養育者の側に大きく重心を置いた説明であるのに比較して、後者は乳児の生得的な志向性が他者との相互作用を経験しながら個体内で成熟していくという、乳児の側の個体内発達に重きを置いているものとも考えられよう。しかし、乳児が経験する相互作用は、養育者をはじめとする相互作用の相手が、乳児の心に対してどのようなスタンスを有しているかによってその性質が大きく変化すると考えられるものであろう。さらに、個体内発達を可能にし、支えるものとして重要視される他者との相互作用が、はたしていかなるメカニズムでそれを可能にしているのかという点に関しても、十分に明らかにされてはいない。

Miens も子どもの心の理解の発達に関して、他者との相互作用の経験を重視する立場に立つものであるが、〈mind-mindedness〉概念の呈示は、子どもの発達を支える相互作用の「相手」側の在り方を問うものである。そして、Miens は乳児の心についてある意味では実体以上の存在を仮定し、心的状態を「過剰」に読みとってしまうことが、結果的に子どもの心の発達を促進するような相互作用の在り方の実践を導き、支えていることを指摘しているのである。「アズ・イフ理論」と同様の養育者のスタンスを重視しているとも考えられるが、なぜそれが重要なのかというと、子

どもとの間で行われる相互作用の在り方がある一定の方向に導くことで子どもの心の理解の発達を引き上げるような環境を整えることになると考えられるからであり、そのような相互作用の在り方を具体的に示そうとした点で貢献していると考えられよう。

7. <mind-mindedness>に残された課題

最後に、Meinsの呈示する養育者の<mind-mindedness>について、今後検討していく必要があると思われる問題に触れておきたい。

まず、養育者が子どもに早期から心の存在を仮定することの重要性が指摘されているが、ある意味で実際以上に子どもの心を読みとり、それを絡めた相互作用を持つということが子どもの発達の中のどの段階で重要なのかという点については未だ明らかになっていない。発達のどの段階でも、すなわち「いつも」実体以上に心を読みとり、働きかけることが、子どもの心の発達にとって「いつも」重要なのであろうか。例えば乳児の自他の心の理解に関しては、9ヶ月頃に1つの発達の變化が存在し、他者が心的世界を有することへの気づきが生まれ、社会的参照視や共同注意の成立が見られるなど、自分の心的状態を他者のそれに合わせて調整することができるようになるということが指摘されている。このような乳児の側の発達の變化と、養育者の側の<mind-mindedness>の作用はいかなる関係にあるのだろうか。生後間もない時期、9ヶ月頃、あるいは12ヶ月頃、といった乳児の成長に伴う各段階での<mind-mindedness>の作用について、時期に特有の姿があり、刻々と変化していくものなのか、あるいは時期を超えて普遍的に重要性を持つのか、今後精緻に取り上げていく必要があるだろう。

さらに、いかなる子どもの行動によって養育者の<mind-mindedness>は誘発されるのかという点も十分に検討されてはいない。養育者の<mind-mindedness>が、養育者側から子どもへの一方的なあてはめではなく、子どもとの実際のやりとりにおける相互規定的な性質を持つもの

であると考えるとき、子どもの側が有している誘発因との関連や、発達に伴う行動の變化、すなわち誘発因の變化と誘発される<mind-mindedness>の性質的變化の有無の可能性についても検討していく必要があると考えられよう。

以上、本稿では子どもの心の理解の発達について、養育者との関係が持つ役割に着目し、Meinsが提唱する養育者の<mind-mindedness>とそれが支える子どもの発達を促進するような相互作用の在り方について概観してきた。先に指摘したように、Meinsらによる一連の説明は、現在のところ実証的な研究による裏付けに基づいたものはない。従って、彼女らが提示したようなメカニズムで養育者の<mind-mindedness>が子どもの心の理解を支え、促していくものなのかを実証的に明らかにしていくことは今後に残された課題である。それに加え、上で指摘したように、子どもの発達段階に応じた養育者の<mind-mindedness>の喚起と機能に関する問題を検討していくことで、養育者との関係が子どもの心の発達に対して持ちうる役割について、更なる知見が得られるのではないだろうか。

引用・参考文献

- Ainworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. J. (1974). Infant-mother attachment and social development: Socialization as a product of reciprocal responsiveness to signals. In M. P. Richard (Eds). *The introduction of the child into a social world*. London: Cambridge University Press.
- Bretherton, I. & Beeghly, M. (1982). Talking about internal state: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18, 906-921
- Brown, J. R. & Dunn, J. (1991). You can cry mum: The social and developmental implications of talk about internal states. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 237-256

- Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., Tesla, C., & Youngblade (1991). Young children's understanding of other people's feeling and beliefs: Individual differences and their antecedents. *Child Development*, **62** (6), 1352-1366
- Fernyhough, C. (1996) The Dialogical Mind: A Dialogic Approach to the Higher Mental Functions. *New Ideas of Psychology*, **14**, 47-62
- Kaye, K. (1982) The mental and social life of babies: How parents create person. Chicago: University of Chicago Press. 鯨岡峻・鯨岡和子(訳) (1993). 親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするか. ミネルヴァ書房
- Meins, E. (1997). Security of attachment and the social development of cognition. East Sussex, UK: Psychology Press.
- Meins, E. (1997) Security of attachment and maternal tutoring strategies: Interaction within the zone of proximal development. *British Journal of Developmental Psychology*, **15** (2), 129-144
- Meins, E. & Fernyhough, C (1999). Linguistic acquisition style and mentalising development: The role of maternal mind-mindedness. *Cognitive Development*, **14**, 363-380
- Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J. & Clark, C, D. (1998). Security of attachment as a predictor of symbolic and mentalising abilities: A longitudinal study. *Social Development*, **7** (1), 1-24
- Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E. & Tuckey, M. (2001). Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on Infants' mental processes predict security of attachment at 12 months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **42** (5), 637-648
- Perner, J., Ruffman, T. & Leekam, S.L. (1994). Theory of mind is contagious: You catch it from your sibs. *Child Development*, **65** (4), 1228-1238
- Trevarthen, C. (1993). The self born in intersubjectivity: The psychology of infant communicating. In U. Neisser (Ed.), *The Perceived Self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*. London: Cambridge University Press. Pp.121-173
- Vygotsky, L.S. (1978). Mind in society: The development of higher psychological process. In M.Cole, V. John-Steiner, S. Scribner, & E. Souberman (Eds.). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Wellman, H. M., Cross, D. & Watson, J (2001). Meta-Analysis of Theory-of-Mind Development: The Truth about False Belief. *Child Development*, **72** (3), 655-684
- Zeedyk, M.S. (1996). Developmental Accounts of Intentionality: Toward Integration. *Developmental Review*, **16**, 416-461

(修士課程)